

出雲大社：本殿の変化

出雲大社は創建以来、幾度も建て替えられてきました。遷宮の伝統（「大社の定期的な再建」）は、神社の境内や構造、特に本殿の姿に影響を与えてきました。「出雲大社と神々の国のまつり」の展示では、各時代にあったと思われる本殿の姿を多数展示しています。

初期の本殿は大規模なものだと言われていますが、2000 年の考古学的発見まで、物理的な証拠となるものはほとんどありませんでした。例外として、「金輪御造営差図」のレプリカが展示されています。この図は 13 世紀から 16 世紀にかけて作成されたもので、本殿は 9 本の柱を 3×3 の構造になっています。柱の直径は 3 メートルで、3 本の丸太を金属製のバンドで束ねています。建物の高さは明記されていませんが、入り口の階段の長さは約 109 メートルと記されており、かなりの規模の建物であることがわかります。2000 年には、本殿の近くで数本の柱の跡が発見され、かつてこのような巨大な建造物が存在したという説に信憑性が出てきました。柱の大きさや配置が『金輪御造営差図』の記述と類似していることや、放射性炭素年代測定の結果、1248 年に設置された可能性が高いことがわかりました。

このような新しい証拠があるにもかかわらず、13 世紀の本殿の正確な姿を決めるのは難しいものです。展示されている 5 種類の 1/50 スケールの模型は、それぞれの建築家が本殿の姿を表現したものです。

これらの模型は、仏教建築の影響を受けて赤く塗られた本殿を表しています。13 世紀から 17 世紀にかけて、出雲大社は近隣の天台宗寺院と密接な関係にありました。博物館の展示室には、1609 年のジオラマがあり、赤く塗られた本殿や社殿、境内に建つ三重塔などが描かれています。

1667 年に大社が大規模に再建されたとき、仏教的な影響を減らすことが意識されるようになりました。1667 年に行われた社殿の大改造では、本殿とその周囲の建造物は無塗装とされ、仏教寺院によく見られる鐘楼は取り壊されました。塔の鐘と大社の壮大な 3 階建ての塔は、他の宗教施設に寄贈されました。このように神社の姿が大きく変わったことは、1667 年当時のジオラマを見れば一目瞭然です。現在の本殿は 1744 年に建立されたものですが、1667 年当時の本殿とほぼ同じです。

過去数世紀の間、本殿は折々に再建されましたが、1744 年以降、とりわけ 1952 年に現在の建物が国宝に指定されてからは、新造は行われていません。その代わりに、およそ 60 年ごとに大規模なメンテナンスが行われています。最近では、2013 年に檜皮葺きの屋根の葺き替えが行われました。展示室の奥の壁には、1881 年から 1953 年まで屋根を飾っていた巨大なまた状の先端装飾と銅片が展示されています。

